

原著

Thomas Hardy の *Jude the Obscure* における Sue Bridehead の心理分析

橘 智子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成4年3月11日受理)

A Psychological Analysis of Sue Bridehead
in Thomas Hardy's *Jude the Obscure*

Tomoko TACHIBANA

Department of Medical Social Work

Faculty of Medical Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-01, Japan

(Accepted Mar. 11, 1992)

Key words : Thomas Hardy, Sue, sexual ambivalence, legal marriage, Christianity

Abstract

Jude the Obscure, which is Thomas Hardy's last and most difficult novel, is regarded as a pioneer of twentieth-century literature on sexual revolution. In this essay I will focus on heroine Sue and analyze her psychological conflict in her sexual ambivalence caused by a tenderness characteristic of both sexes. And I will consider how Sue, a type of a new woman carving liberalism and hating Victorian convention and Christianity, is frustrated to return to conventional society.

要 約

『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*)はThomas Hardyの最後の小説である。出版当時は、ビクトリア朝社会でタブー視されていた sexuality をテーマにした問題小説として非難・排斥された。しかし現代では、20世紀 sexual literature の先駆者的存在と位置付けられている。

この小論では、ヒロイン・スー (Sue) に焦点をあて、彼女の男女両性的優しさから引き起される sexual ambivalence の狭間で、心理的葛藤に翻弄され、挫折していくプロセスを分析する。合わせて、ビクトリア朝社会の因習とキリスト教を嫌悪し、liberalism を要求する 'New Woman' として登場したはずの Sue が、最終的には、その因習とキリスト教に回帰せ

ざるを得なかった事情を考察する。

1. はじめに

Jude the Obscure (1895) (以下 *Jude* と略す) は, Thomas Hardy (1840—1928) が小説家から詩人に転向する契機になった問題小説である。*Jude* が出版されるや批評家は酷評し, 読者は激しく攻撃した。*Life* によれば 'the Bishop of Wakefield announced in a letter to the papers that he had thrown Hady's novel (= *Jude*) into the fire'¹⁾と, ある。しかし一方では, 詩人 Swinburn (1873—1909) は, 'The beauty, the terror, and the truth, are all yours alone... I think it would hardly be seemly to enlarge on all that I admire in your work...'²⁾と最高の賛辞を呈している。このように賛否両論の中で迎えられた *Jude* がどんな小説であるか, 簡単に紹介する。

Hardy は *Jude* (初版) の序文で

For a novel addressed by a man to men and women of full age, which attempts to deal unaffectedly with the fret and fever, derision and disaster, that may press in the wake of *the strongest passion known to humanity*; to tell, without a mincing of words, *of a deadly war waged between flesh and spirit*; and to point the tragedy of unfulfilled aims, I am not aware that there is anything in the handling to which exception can be taken.³⁾

(italics mine)

と述べているように, 人間の最も強い情熱—sexual instinct を扱い, flesh (肉) と spirit (霊) の拮抗を赤裸々に語りたいと言っている。*Jude* が20世紀末に世に出ていたら, すんなり受け入れられ, 高い評価を得たであろう。と言うのも *Jude* は, 20世紀文学の主要テーマである「性と女性」「反結婚」「自由結婚」「不倫」などを先取りした'sexual revolution'の小説だからである。しかし, 100年前のビクトリア朝社会には *Jude*

を不道徳極まる小説として異端視する背景・思潮があった。即ち「霊」は崇高なもの「肉」は卑しいものとするビクトリア朝のキリスト教と快楽を罪悪視する Evangelicalism⁴⁾ (福音主義) に根ざした保守的な道徳律が尊重されていたからである。従って sexuality や immoral love について語ることも書くこともタブーとされ, 文学では扱い切れないテーマであった。この難問にあえて挑戦した Hardy の意図は, 偽善的なビクトリア朝の道徳観によって, 社会的にも性的にも不当にしいたげられる女性の側に立ち 'Sexuality' と 'marriage' の不条理を告発することにあつたと思われる。

この小説は, Hardy が 'the tragic issues of two bad marriages,⁵⁾とやっているように, Jude Fawly と Arabella Don; Sue Bridehead と Richard Phillotson の二組の結婚と離婚。Jude と Sue の内縁関係と別離を複雑に絡ませた揚句, 再び元のカップルに回帰させる図式である。これを立体化すれば, ヒーロー・Jude を頂点に, Sue と Arabella を二点とする triangle と, ヒロイン・Sue を頂点に Jude と Phillotson を二点とする triangle の二重構造を更に交錯させ, Jude, Sue, Phillotson, Arabella の quartet の構図となる。上述の「序文」で「flesh」と「spirit」の死闘」と述べていたように, Jude は肉感的な Arabella (flesh) と霊的な Sue (spirit) の間を振幅し翻弄され, 学問への夢も破れて挫折する。Sue も自由を希求し, 因習的な社会の掟に反抗するも果たさず, 加えて自己の内部では「霊」と「肉」が相克し, 心理的葛藤の末に挫折する。Hardy は, 彼らが理想と現実の狭間で圧殺され, 所詮, 理想は幻影に過ぎなかった, との絶望の中で挫折していくプロセスを描写している。この小論では, ヒロイン・Sue をめぐる三人の男性との関係を通して, Sue 像と彼女の sexual ambivalence と complexity を, 表層と深層から分析し, 合わせて彼女の結婚観を考察していきたい。

2. Sue 像

Hardy は *Life* の中で 'Sue Bridehead was a type of woman which has always had an attraction for me, but the difficulty of drawing the type has kept me from attempting it till now.'⁶⁾ と言っているが, Hardy にとって Sue は「魅力的な女性像」であった。これまでのヒロインと一味違った女性を創造しようとしたのか, 描くのに随分時間をかけたようだ。この物語の中で Sue と関わる男性たちも異口同音に「彼女のためなら死んでもいい」と言っている。では, Sue がどのような女性であったか, 本文から引用してみよう。

例 1. She (=Sue) was not a large figure, that she was *light and slight*, of the type dubbed *elegant*.' (p. 106)

例 2. *so ethereal a creature* that her spirit could be seen trembling through her limbs, he felt heartily ashamed of his earthliness.... (p. 223)

例 3. the delicate lines of her profile, and the *small, tight, apple-like convexities* of her bodice,.... (p. 224) (italics mine)

とあるように, Sue の外観は小柄で華奢^{きゃしゃ}, この世のものとは思えない美しさ, 小さくしまった胸…と生命力が弱々しく, 肉を感じさせない霊的で知的な女性として描いている。内面的にはどうであったか, Sue の少女時代を見ると, 'a pert little thing,' 'tight-strained thing' (p. 133), 'she could do things that only boys do, as a rule.' (p. 134) と, 生意気で神経質, 少年たちだけが行なうことをしたと言っている点から推察して, 潜在的に男性願望があったと見てよい。つまりユングの言うアニムス⁷⁾的傾向である。彼女のアニムスは, 幼児期に母親が家出し父親に育てられ, 少女期は気性の激しい独身の大伯母にあずけられたために, この二人の影響を受けて強化されたものと思われる。要するに母親の愛情が一番必要な時に母親不在の境遇に置かれたため, 女性性が育たないままナルシズ

ムの幼児性を引きずって娘時代を迎えるのである。そして表層では, キリスト教を否定し, ピクトリア朝社会の因習に反抗する「知的な新しい女」として登場する。しかし深層では, ナルシズムの幼児性がアニムスと同一化し情緒不安定で攻撃的である。それに否定している筈のキリスト教と因習のプリンシプルに従って生きている。その証拠に, 常に自分の言動を悔い, 罪の意識に苛まれている。このように表層対深層という ambivalence が心理的葛藤を生じ, 神経症的な言動に駆り立てるのである。Penny Boumelha が 'This is, in a sense, a response to certain feminist and anti-marriage novels of the period.'⁸⁾ と解釈しているが, Sue をフェミニストと捕え, 「反結婚」を主張して性的独立をうたう 'New Woman' と位置付けることも, Albert J. Guerard が 'Sue is one of the most impressive in all fiction of a neurotic and sexually maladjusted woman....'⁹⁾ と言っているように「神経症」で「性的不適応症」の女性と捕えることも出来る。しかしこれだけで, Sue 像を語るのは不十分のように思われる。彼女をマゾヒズム, サディズム, エゴイスト, ヒステリー症と思わせる異常に屈折した言動に駆り立てるものは何であったか, 彼女の女性性と男性性による Sexual ambivalence から論じることにする。

3. Sue の Sexual ambivalence

I have no fear of men, as such, nor of their (=men's) books. I have mixed with them—one or two of them particularly—almost as one of their own sex (=men). I mean I have not felt about them as most women are taught to feel—to be on their guard against attacks on their virtue.... (p. 177)

(italics mine)

と明言しているように Sue は男性も男性の書いた本も恐れなと言い, 男になりきって男性と交際したと誇示する。前述したように, 彼女の性格形成段階において, 環境的欠陥のため安定した女性性を持つことが出来なかった。そこで

彼女のアニムスがこの空隙くうげきに男性的価値観をつめ込み、自己を男性に同一化することで自我を確立しようとしたのではないだろうか。

Sue は18歳の時 Christminster (Oxford の創作名) の大学を卒業してジャーナリストになった青年と15か月間同棲生活をする。この間、彼女はこの青年に sexless の生活を強要し、男同士の友人として楽しく過ごす。しかし青年は、性抑圧の残酷な仕打ちに苦悶した揚句、病気になる死亡する。後になって彼女は Jude に 'His death caused a terrible remorse in me for my cruelty' (p. 178) と自分の 'cruelty' を悔悟しながらも、'I wasn't in love with him' (p. 177) と自己弁解のように言っている。この一文は、彼女の女性性を刺戟して、sexual instinct に目覚めるほどの愛情が青年に持てなかったことを示唆している。と同時に男性より優位に立ち男性を支配するには、sexuality を拒否すべきだとの意識が潜在的にあったのかも知れない。彼女は15か月の間に青年から多くの進歩的な思想や知識を吸収し、読書の指導を受け教養を身につけ、当時の 'New Woman' として成長していく土台とする。

I know most of the Greek and Latin classics through translation, and other books, too. I read Lemprière, Catullus, Martial, Juvenal, Lucian, Beaumont and Fletcher, Boccaccio, Scarron, De Brantôme, Sterne, De Foe, Smollett, Fielding, Shakespeare, the Bible, and other such ; (p.p. 176~177)

と、これみよがしに羅列しているが、紀元前の叙情詩人 Catullus から18世紀の小説家 Smollett に至るまで実に奇異な感じがする読書内容である。しかしこれは彼女が15か月の耳学問で得た学識に過ぎず、確たる学問的素養と深みのないことを示唆するものであり、Jude や Phillotson との間で展開される会話に見られる論理的矛盾や支離滅裂な論法からも証明される。

青年と Sue の sexless の関係において、大方の批評家は彼女の「性的不適應症」を指摘している。しかし Hardy は Sue にこのように反論

させる。

People say I must be cold-natured, - sexless - on account of it. But I won't have it ! Some of the most passionately erotic poets have been the most self-contained in their daily lives. (p. 179)

彼女は 'cold-natured' でも 'sexless' でもない、それどころか sexual passion を抑制しているかのような口振りである。しかし青年との同棲段階では、幼児性のなごりであるナルシズムが自己を与えないで、相手の愛を自分に向けさせようとしているに過ぎない。この例証として次の文を引用する。

At first I did not love you, Jude ; that I own. When I first knew you I merely wanted you to love me. I did not exactly flirt with you ; but that inborn craving which undermines some women's morals almost more than unbridled passion — the craving to attract and captivate, regardless of the injury it may do the man — was in me ; ...it began in the selfish and cruel wish to make your heart ache for me without letting mine ache for you. (p. 422) (italics mine)

相手に愛を要求するが自分の愛は与えない、相手の心は疼かせるが、自分の心は疼かせない、と言った愛の有り様ようは Sue 自身が言っているように「利己的」で「残酷」な欲望に他ならない。そして「愛されたい」欲望の裏に、満たされない愛への渴望が重ねられているように思える。これについて更に例証してみよう。

Sue が教員養成所に在学中に、Jude と遠出した時、最終列車に乗りおくれ、羊飼いの家で一夜を過ごし、翌朝一番列車で帰寮したために学則違反のかどで一週間のかん禁を命じられる事件があった。Sue はこの処置に我慢出来ず部屋の裏窓から脱出、寒い夜、州一番の川を肩までつかりながら歩き渡って Jude の下宿に逃げて来る。ここでも批評家たちは彼女の行動を衝動

的幼児性と見なし、状況判断の出来ない無分別さを指摘している。勿論これは当を得た指摘であるが、その深層では Jude への愛の渴望から衝動的にとった行動のように思える。

Jude の下宿に辿り着いて、彼がかざすローソクの明りに浮かび上がった Sue は '...her clothes clung to her like the robes upon the figures in the Parthenon frieze' (p. 172) と、裸身にも近い姿であった。これは表層では女性性を抑圧し、アニスムを強調しながら、深層では女性性の解放と異性への求愛を示唆している。つまり sexual ambivalence の暗示である。これを Wright が次のように分析している。

There is a suggestion of sexual ambivalence, too, in her appearance in Jude's clothes, looking as 'boyish as Ganymedes' and speaking with 'epicene tenderness.' Sue's ambivalence, in fact, represents a deep split within herself. She wants to do what the boys do, to be taken seriously in the world of men, and yet to retain her sexual difference.¹⁰⁾

つまり Sue は男性性になりきれず、さりとて女性性を捨てきれない。例えば、濡れた衣類を乾かしている間、Jude の服を着ている姿はガニメデスのような美青年に見える。しかし Jude が彼女の側に座わると 'She blushed' (p. 173) と顔を赤らめている。また、冷えた体を温めるようにとブランディの瓶をすすめると、'I can't drink out of the bottle, can I?' (p. 173) と言ってグラスで飲む所作にも、Sue の 'epicene (both sexes) tenderness' による sexual ambivalence を暗示している。Sue はこの「性的チレンマ」に苦悩し心理的葛藤の末、内部分裂をおこし「神経症」と思われる言動をとる。その影響をまろに受けて翻弄される Jude は 'that epicene tenderness of hers was too harrowing' (p. 184) とか、'One thing is a warm one, the other a cold one.' (p. 186) とか言って悩む。そして彼女の両性に困惑するあまり、Sue を「無分別」で「気まぐれ」な人間と思うのである。彼女は男性性（不安定・攻撃的）と女性性（安定・優

しさ）の間を振幅しながらじょじょに女性性に傾斜していこうとしていた。Jude を愛し始めたからである。それは、Jude が別居中の妻 Arabella の存在を告白した時、'Why didn't you tell me before!' (p. 198) と Jude をなじる言葉にこめられている。と同時に彼女の自由主義はまがいものであることが判明する。つまり彼女が内蔵するキリスト教と因習に彼女の「自由思想」が束縛されるからである。そして愛してもいない Phillotson と結婚する。この愚かしい行為の原因を語り手は、'asserting her independence of him' とか 'retaliating on him for his secrecy?' (p. 209) と分析しているが、まさしく、Jude への愛の欲求が断たれた反動からではなかったか。つまり Sue は Jude を愛しながらも、彼が妻の存在を隠していたこと、それにもまして自分より前に彼が女性を愛した事実に彼女のプライドが傷つき、彼の愛がなくても平気という気概を誇示し、彼に一矢報いるつもりで衝動的にとった行動であろう。この根底には断ち切れない Jude への愛と Arabella へのジェラシーがあったと思われる、それは故意に 'being the only married relation' (p. 203) を理由に、結婚式で彼女を新郎 Phillotson に引き渡す花嫁の父親役を Jude に依頼するという、Jude にも Sue にも残酷極まりないサド・マゾヒスト的行為に現われている。しかし、Christminster の青年との同棲とは異なり、法的結婚にはそれに付随する半ば強制的な sexual relation が、妻の義務として要求される。Sue はこれに反抗して引きおこす sexual ambivalence に精神的にも肉体的にも引き裂かれ、過度の「神経症」状さえ帯びて来るのである。

4. Phillotson との結婚

'unusual foolishness' に駆られて入った Phillotson との結婚生活は一か月も経たぬうちに破局を迎え、結婚すべきでなかったと後悔する。そして 'one ought to be allowed to undo what one has done so ignorantly!' I daresay it happens to lots of women; only they submit, and I kick....' (p. 256) と、無知でしたことは元に戻すべきだと離婚を仄めかす。愛せない

夫に対する性的嫌悪感は、彼が寝室に入って来ただけで窓から飛び降りるまでに高じる。ここでも幼児性の衝動的行動と彼女の不感症が指摘される場所であるが、Aunt Drusilla が '...no woman of any niceness can stomach.' (p. 228) と言っているように Phillotson は Sue のような女性には体質的に合わないおぞましい感じのする男性だったこと、Phillotson が Sue と結婚して以来 Jude を 'the shadowy third' (p. 286) と意識していることから、Sue の心の中には Jude が住みついており、Jude への愛に比例して Phillotson への性的嫌悪感が高じた結果ではなかったかと思われる。その例証として、Sue の言葉を引用しよう。'I — I thought you cared for nobody — desired nobody in the world but me at that time — and ever since!' (p. 291) つまり夫を嫌い窓から飛び降りたのは Jude が彼女だけを愛してくれていると信じたからと言っているのは、とりもなおさず彼女が Jude だけを愛していたことの告白に他ならない。このように彼女の「幼児的未熟さ」の行動の裏には常に Jude への愛がすけて見えるのである。愛情のない結婚は不道德だとし、結婚の束縛からの解放を訴える妻に、夫は法律を盾に苛酷なことはしたくないと、父親が娘を嫁に出すように Jude の許へ送り出す。しかしこの夫の優しい処置が、彼女の罪悪感となって Jude との生活に影を落すのは皮肉である。これは表層では自由主義に根ざした「新しい女」に見えるが、深層では内蔵している因習的な道德規範（福音主義）が自分の行為を糾弾し、心理的補賞作用を起すからである。従って彼女の行動パターンの図式が成り立つ。攻撃的行動—幼児的反動—悔悟—罪悪感—心理的葛藤—優しさ—の繰返しである。男性性に始まり女性性に終るこのプロセスの中で彼女は sexual ambivalence に翻弄され苦悩したのである。

しかし Sue は愛する Jude と同棲生活に入っても sexual relation を拒む。性抜きで愛して欲しいと Jude に強要する。それは、Sue がまだ Phillotson の法律上の妻である意識がプレッシャーとなって彼女の性抑圧につながっていたようだ。夫と正式離婚して Jude と肉体的に結

ばれた時、'In fact, I am easier in my mind than I was, for my conscience is clear about Richard, who now has a right to his freedom. I felt we were *deceiving him before*' (p. 323) (italics mine) と言っていることから明白である。そして 'a right to his freedom' は 'a right to her freedom' でもあった。このように概観してみると、彼女は、古い因習的道德律に新しい自由主義の衣を着せたような女性と言えよう。

5. Jude との結婚

二組のカップルが正式に離婚して一件落着に見えたこの成り行きに新しい問題が立ち上がる。「法的結婚」の拒否である。なぜ「法的結婚」をめぐるかとも紛糾するのだろうか。結婚は sexuality を公認し強制する「因習的な制度」と見なし、正式結婚にふみきれない Sue の深層心理を彼女の論理から分析してみる。

例 1. I have just the same dread lest an iron contract should extinguish your tenderness for me, and mine for you.... (p. 307)

例 2. I think I should begin to be afraid of you, Jude, the moment you had contracted to cherish me under a Government stamp, and I was licensed to be loved on the premises by you.... (p. 308)

例 3. I think I would much rather go on living always as lovers, as we are living now, and only meeting by day. It is so much sweeter.... (p. 307)

上の例文から要約すると、'a Government stamp' (政府の許可証) によって 'iron contract' (法的結婚) を結ぶと、お互いの愛情が消滅するのではないかと恐れている。即ち愛の純粹性をそこなうのではないかと危惧の念を抱いているように見える。そして夫婦でなく恋人として sexless の生活を望む。愛の永続性を幻想の世界に求めロマンチックに見えるが、一種の現実逃避としか考えられない。それは Phillotson との不幸な結婚と父母も含めて一族の呪われた結婚が性的オ

ブセッション となり、同じ失敗を繰り返すのではとの懸念が性抑圧につながり、Jude との実質結婚にふみきる勇気がなかったためであろう。しかしこれは自己保全でありエゴイストチックな理想論に過ぎない。そして彼女の理想論には必ず幼児的反動が付随するのである。このような Sue の idealism が Jude の先妻 Arabella の出現によってもろくも崩壊する。またもや Arabella へのジェラシーであった。Sue は Jude が自分以外の女性を愛さない限りは sexless の生活は安泰とふんでいたのであろうか。必死でとめる Sue を振り切って Arabella に会いに行った Jude の帰りを、時間をはかりながら二人の上にあらぬ妄想を馳せる Sue の姿に、性的独立と自由を主張する「新しい女」のかけらもない。Jude が帰宅すると、泣いて抱きつき、'I am not a cold-natured, sexless creature am I?... I do belong to you, don't I? I give in!' (p. 317) と訴えている。'I give in' とあるのは、Sue が自分の sexual instinct を抑制出来ないことを意味していると思われる。遂に彼女は Jude と霊・肉一体化することで、sexual ambivalence から解放され、女性性に安定したかに見える。つまり Jude と sexual relation を結んだ翌朝、鏡にうつった自分の姿に新鮮な魅力を感じ、うっとりしているからである。そして What a meanly sexual emotion this was in her, and hated herself for it! (p. 319) と、彼女の中に「性感情」があることを認識している。しかし 'meaning' とか 'hated herself for it' (=sexual emotion) とあるのは、性を卑しいとするキリスト教の観点にてらして「性感情」に身をゆだねたことを罪悪視するためであろう。ここで Hardy は霊的な Sue に肉を与えることで生命をふき込み結婚のあるべき姿にしたかに見える。しかし Sue は Jude に sexual relation を許したあと、本来なら要求するはずの法的手続きを拒否し結婚登記所に三度出掛けしたが、その都度引きかえしている。その理由を明かすために Arabella と Sue の結婚観を対比してみよう。

Arabella は

Life with a man is more *business-like* after it,

and *money matters* work better. And then, you see, if you have rows, and he turns you out of doors, you can get *the law to protect you*, which you can't otherwise, unless he half runs you through with a knife, or cracks your noddle with a poker. (p. 320)

と、言い、Sue は、

What Arabella has been saying to me has made me feel more than ever how *hopelessly vulgar* an institution legal marriage is — a *sort of trap to catch a man* — I can't bear to think of it. (p. 322) (italics mine)

と反論している。上の引用文から二人の結婚観が正反対であるのは明白である。Arabella は「法的結婚」は妻を保護してくれるし、社会的・経済的利益を保証してくれる利点を説いている。Sue は、この考えを批判的にとらえて、物質的利益を得るための法的結婚は「卑劣な手段」で男を捕える「わな」のようなものだから法的手続きはしたくないと力説する。Arabella の方は現実的で、むしろ正当な考え方である。Sue の方は明らかに非現実的でこっけいでさえある。と言うのは「法的結婚」でも「反法的結婚」でも同じことだが精神的自立を保持するためには、経済的自立が必要だからである。Sue にはその保証がない。Sue の理想論の裏には未熟でエゴイストチックな自由への希求がみられる。

しかし Sue は「生む性」に目覚める。つまり女性性に安定し二人の子供に恵まれ、三人目を身ごもっている。ここで Hardy は悲惨な事件を挿入して、Sue の精神構造を破壊し、そのショックによって法的結婚に回帰させている。それは Jude と Arabella の間に生まれた、あだ名が「時のじいや」(a little Father Time) という少年を引取って育てていたが、法的結婚をしない Jude たちに向けられた社会からの迫害と貧困を見かねて「僕たちは多過ぎるから死にます」とメモを残して、二人の幼い異母弟妹の首を吊り、自分も首を吊って自殺する事件である。Sue はショックのあまり流産し身心共に引

き裂かれる。そして Jude と肉欲にふけった不倫の愛に神が下した審判だと受けとめ、神の前で夫婦の誓をしたのは Phillotson だから彼が本当の夫だと主張して去っていく。Jude を精神的には愛しながら、肉体的には断ち切っていく Sue は、再び肉 (Phillotson) 霊 (Jude) に分裂し、心理的葛藤に苛まれる。彼女が再婚して始めて夫の寝室を訪れた時、夫が「本当にいいのか」と三度念をおすと 'It is my duty (p. 476) と答える。しかし夫が抱き上げキスをすると、'A quick look of aversion passed over her face, but clenching her teeth she uttered no cry.' (p. 477) と、彼女は嫌悪の表情を浮かべ歯をくいしばって堪える。sexless を望み、情熱的な精神的愛を希求した Sue に霊を捨てさせ肉に追いやったのは最も苛酷な罰であると言えよう。Mrs. Edlin が 'Quite a staid, worn woman (=Sue) now. 'Tis the man (=Phillotson) — she can't stomach un, even now!' (p. 489) と証言していることから明白である。Jude は30歳の若さで物理的な死を、Sue は生きて精神的な死をとげる。二人は因習的社会に反抗し、法的結婚の枠を破ろうとするが、余りにも理想と現実のギャップの大きさに絶望して挫折するのである。Penny Boumelha が Sue の挫折をこのように説明している。

Sue's breakdown is not the sign of some gender-determined constitutional weakness of mind or will, but *a result of the fact that certain social forces press harder on women in sexual and marital relationships*, largely by virtue of the implication of their sexuality in child-bearing.¹¹⁾ (italics mine)

つまり Sue の挫折は、女性を単に「生む性」と見なし、性と結婚の関係を不当におしつける「社会の圧力」と言っている。しかし今一つ付加すれば、Sue が自分たちの置かれた現実を把握して対処していくだけの能力に欠けていたことも指摘される。Jude と Sue は、現状理解の努力も、その対応策も考えずに、ただ「分かってもらえない」と被害者意識にとらわれ、対外的問

題解決も、対内的成長も見られない。だから、彼らが否定した因習的社会から報復的に否定され、精神的ジレンマと生活苦に陥り、破局を迎えるのである。

6. む す び

T.R.Wright が

As a pioneering feminist Sue Bridehead fails fully to overcome the problem of liberating herself from male expectations without repressing her own sexuality. As a late Victorian she finds herself torn between ascetic and hedonistic, Hebraic and Hellenistic, tendencies...¹²⁾

と、述べているように、Sue は「フェミニストのパイオニア」として、女性の性解放と独立には失敗した。それは、Sue が表層では自由思想に憧れ、男性との対等な性関係を要求しながら、深層ではビクトリ朝ア社会の因習とキリスト教を捨て切れなかったためにフェミニストとしての節を通し得なかったのである。そして ascetic (禁欲) 対 hedonistic (快樂), Hebraic (Christianity) 対 Hellenistic (異教徒的自由思想) の二項対立のアンビバランスに精神が引き裂かれ、その心理の揺れに男性性と女性性が交互に作用して情緒不安定となり、自己卑下と自信喪失に陥る。この繰返しの中で Sue は自滅していくことになる。Sue のこの苦悩と混乱と挫折は、19世紀末のフェミニストたちの姿ではなかったかと思われる。また20世紀末のフェミニズムの原点とも考えられる。

自然に根ざした女性性を抑圧することでアニスムと同一化し、その sexual ambivalence に翻弄される Sue。そして 'to be loved' と満たされない愛を希求しての旅路の果てに、Jude との霊・肉の愛によって完全に女性性に立ち帰ったのも束の間、自己放棄をせざるを得ない状況に置かれたのは皮肉である。

Hardy は、'We are a little beforehand, that's all. In fifty, a hundred, years the descendants of these two will act and feel worse than we.'

(p. 341) と、Jude と Sue に語らせているが、まさしく20世紀末をにらんで Jude と Sue を創造したように思えるのである。Hardy は、sexuality を自然のあるべき姿として考えないビクトリア朝社会の道徳規範と因習を、批判をこめて風刺すると共に、Jude と Sue を通して近代文明社会における若者たちの病める精神の問題を提起しているのではないだろうか。

Hardy が50年、100年先を予見した通り、現代は、反結婚の傾向が強まっている。女性が性的独立を主張し、法的結婚を嫌い、たとえ結婚

しても sexual relation を拒否すれば、家庭崩壊・社会秩序の混乱・種族保存が危機にさらされ、人類滅亡にもなりかねないことへの警告とも受取れるのである。ともあれ、結婚における理想的な精神的愛と現実的な性的愛の相克は、この世に男と女がいる限り永遠のテーマになるだろう。

この小論は1991年10月19日、日本ハーディ協会35回大会におけるシンポジウムで発表した内容を一部修正・加筆したものである。

文 献

- 1) Florence Emily (1965) *The Life of Thomas Hardy*. The Macmillan Press LTD, London, pp 277.
- 2) *ibid.*, pp 270.
- 3) Thomas Hardy (1963) *Jude the Obscure*. The Macmillan, London, p.vi. このテキストからの引用は、以後、引用文の末尾のかっこ内にページ数を記入する。
- 4) J.P. ブラウン (松村昌家訳) (1988) 『十九世紀イギリス小説と社会事情』。英宝社、東京、pp 80.
- 5) Florence Emily (1965) *The Life of Thomas Hardy*. The Macmillian, London, pp 271.
- 6) *ibid.*, pp 272.
- 7) マリオン・ウッドマン (1987) 『女性性の再発見』。創元社、大阪、pp 237.
- 8) Penny Boumelha (1982) *Thomas Hardy and Women Sexual Ideology and Narrative Form*. The Harvester Press Limited, Sussex, pp 145.
- 9) Albert J. Guerard (1949) *Thomas Hardy*. Oxford Press, London, pp 109.
- 10) T.R. Wright (1989) *Hardy and The Erotic*. The Macmillan Press LTD, London, pp 125.
- 11) Penny Boumelha (1982) *Thomas Hardy Women Sexual Ideology and Narrative Form*. The Harvester Press Limited, Sussex, pp 153.
- 12) T.R. Wright (1989) *Hardy and The Erotic*. The Macmillan, London, pp 120.